研究の趣旨及び目的

通級指導教室は、通常の学級に在籍する軽度の障害がある子どもに対して特別な指導を行う場として機能してきた。特別な指導とは、障害に基づく困難の改善に関する指導や、教科学習を補充する指導等であり、通級指導教室に通う児童（以下、通級児と記す）本人に対する指導を中心としたものである。

しかし、WHOが提唱した新国際障害分類にも見られるように、障害は本人の心身機能の状況のみによって既定されるものではなく、施設・設備や機器等の物理的環境因子や周囲他者等の人的な環境因子によって変容しうるものである。したがって、障害のある人の生活の質を高めていくためには、本人の心身機能の改善ばかりでなく、環境因子の検討と改善が不可欠である。

筆者は、このような見地から、通級児が学校生活を過ごしやすくするためには、本人への指導に加えて、学校生活の大半の時間を過ごす通常の学級へのはたらきかけを行っていく必要があると考え、実践的研究を行ってきた。これは、通級指導教室の担当教員とともに、通常の学級において障害理解を内容とする授業を実施し、授業分析を行うものである。その結果、通常の学級の児童が通級指導教室や担当者に対して関心を持つようになったり、補聴器等の機器の大切さに気づいたり、通級児を含めた級友同士のお互いの違いを認め、助け合う気持ちを表現できるようになったり、という成果を得た。

一方、通常の学級では、新学習指導要領による「総合的な学習の時間」が始まっており、その内容として障害理解を選択する学級が見られた。障害のある子どもが通常の学級で学ぶ機会が増えている現在、通常の学級の子どもたちが障害について主体的に学び、理解を深めることは大変重要である。そこで、特殊教育研究者や通級指導教室の教員が持つ障害に関する知識や経験を活用することで、通常の学級における「総合的な学習の時間」を更に実際的で深い内容の授業にすることが可能ではないかと考え、本研究を着想した。

障害に関する理解は単なる知識の獲得だけでは十分ではない。また単一学年で短期的に実施しても効果的な授業の展開は難しく、障害理解は深まらなないと考えられる。そこで本研究では、小学校の「総合的な学習の時間」において、障害に関する体験学習と体験発表を重視し、多学年にわたって重層的に展開される授業の構成を目指した。そのため以下のことを明らかにすることを目的とした。

- ① 小学生を対象とした障害理解授業において、どのような指導内容（教材、授業展開）が適切であるかを明らかにする。
- ② 通級指導教室教員と通常の学級の教員との連携の実際とその課題について明らかにする。